

ブリッド ハイブリッド ロケット

実験装置を初めて搭載

来月12日大樹で打ち上げ

【赤平】実験装置を搭載した小型ロケットの打ち上げ実験が3月12日午後7時から、大樹町で行われる。北大の研究グループが開発したハイブリッドロケットを使い、実験装置を積み込んだ「ミッション打ち上げ」は初めて。機体はすべて道内で製造し、25日、製作先の赤平の企業で公開された。

(平野明)

実験は北海道ティー・エル・オー、NPO法人「内部にセンサー」を模した「CANSAT」間、地上との間で通信実験を行う。

制御コンピュータ、電源装置、通信装置を積み込み、CANSATは、道工にミッションでロケットから切り離し、パルセーター装置(無火薬式分離機)は東海大のそれぞれで落下するまでの



大樹で打ち上げるロケット製作した植松さん

れの学生が製作し、実験には、学生教育の狙いも込められている。

また、札幌市中央区の道経センタービルでも3月12日午後1時から、CANSATや北海道衛星に関する講演、展示のイベントを実施。打ち上げの様子を携帯電話をこ

でイベント会場へ送信する予定。ミッション担当の道工大の佐鳥新助教は「実際のミッションにはセンサーやICなどの実験が見込まれる」と話している。

大樹町で3回打ち上げたロケットと同型機。全長1・6メートル、直径8・9センチ、重量10・5キログラムで回収する。これまでの機体は東京の会社が発注していたが、今回は赤平市の植松電機が

エンジンを含め製作し、北大の学生が協力した。植松専務は「金属加工のコストを下げることで従来200万円かかっていた製作費が6万円ほどになった。量産化も可能」としている。

実用ロケット

エンジンの公開燃焼実験実施

【赤平】大樹町で過去3回打ち上げ実験を行った小型ロケットを発展させた実用ロケットのエンジン公開燃焼実験が25日、赤平市内で行われた。ロケットは気象観測用で、従来と比べ価格の低価格で市販する。ロケットを開発したの

は北大大学院工学研究科の永田晴紀助教授ら。

燃料の推進剤に液体酸と固体燃料を使用したハイブリッドロケット。

打ち上げ経費が安いのは①火薬を使っていない②機体を回収し、再利用するため。実用ロケットは長さ3・7メートル、直径24センチ、4センチの機器を積み込み、65センチを到達高度目標としている。

実験には、固体燃料に

従来のアクリルから燃焼時間の短いポリエチレンを使った。ご音どもに燃焼室から激しい勢いで炎が噴出し成功した。

来年度をめどに打ち上げを実施する予定。

打ち上げ経費は、従来ロケットで回収費用を含め約1000万円かかっていたが、永田助教授は「今回は100万円台で済む」としている。

(平野明)